

## アナイマライ丘陵の茶栽培

—— 現地取材を人文学科教職教育に活かすには ——

### Tea Production in Anaimalai Hills, How to Apply Research Data to Humanities Teaching Course Education

赤井 敏夫

Toshio AKAI

#### (要旨)

本論文は筆者が2014年に南インドのタミルナードゥ州からケーララ州にまたがるアナイマライ丘陵で行った茶栽培に関する調査で得られた知見が、どのように本学人文学部人文学科の教職教育に活用できるのかを検証したものである。そこで明らかとなったのは、現地取材で得た資料は教育の過程で人文学科が教員養成の理念としている「人間行動およびその文化所産との有機的関連をそれぞれ理解し「グローバルな視点を持ち、社会の変化に対応して、絶えず最善の教育を探求し、実践することができる」等の諸要件を充足するための能力を涵養するに相応しい素材となることである。本論文では茶に代表される商品作物を題材にすることによって、いかに地域的農産物が最終的にグローバルな経済流通に組み込まれてゆくか、またそれが成立するためには歴史的にどのような地政学的変化が生じたのか、といった点に関して受講生の理解が深化してゆく可能性を論じる。また現地取材で得られた映像を補助資料として用いた場合受講生の理解がいっそう促進されることも指摘する。

#### (Summary)

The purpose of this paper is to exemplify the application of the data, chiefly obtained by my 2014 research of tea production in Anaimalai Hills, the high land spread over the state border between Tamil Nadu and Kerala in South India, to the Humanities Teaching Course education of Kobe Gakuin University. My research data can be an appropriate substance to materialize the principles of Humanities Teaching Course education, in particular, to train a student profoundly aware of acute synchronization between human behaviors and his/her cultural products, and their connections with international changes and their impact on social transformation, and thus to make the student capable of adapting what he/she learned in the Course education to their own professional skills as a teacher. This paper examines how my research of agricultural products such as tea, coffee, rubber, coconuts, and pepper in Nelliampathy and Kodaikanal is eligible to make the students understand their historical significance, their involvement into global economics established overlapping with the network of British Empire, and cultural multi-layers consequently developed as a form of hybridization of indigenous and European cultures. The profit of the use of visual images and footages as a supplement material that enables the students to understand that this hybridization was accumulated by cross-cultural contacts between nativity and invading forces is also discussed.

キーワード：人文学部人文学科教職教育、茶栽培、インド、アナイマライ丘陵

Key Words : Humanities Teaching Course education, tea production, India, Anaimalai Hills

## 1. はじめに

筆者は2014年度神戸学院大学の学内研究助成金C「インド製茶業をめぐる自然環境と飲食文化の研究～北東州と南インドを中心として～」(福島あずさ人文学部講師との共同研究)を得てインドにおける製茶業の現状とその歴史的背景に関して現地調査を行った。本論文では共同研究における筆者担当分の南インドの製茶業、就中タミルナードゥ州からケーララ州にまたがるアナイマライ丘陵におけるそれを対象に行った調査から得られた知見をもとに、その成果が人文学部の教職教育にどのように活用しえるのかを考察してみた。

人文学部人文学科のアドミッションポリシーにおける教員養成の理念では幾つかの要件が定められているが、本研究の目的は現地取材の結果が以下のようなそれに反映されうるのかを探るものである<sup>1</sup>。

- 一、人間行動およびその文化所産との有機的関連をそれぞれ理解し、幅広い知識および教養を身につけ、さまざまな問題に柔軟で的確に対応することができる教員
- 一、多様な学問領域を学んできたことを授業や生徒指導に生かして、生徒の個性や興味の伸長をはかることができる教員
- 一、グローバルな視点を持ち、社会の変化に対応して、絶えず最善の教育を探求し、実践することができる教員

したがってここで報告する知見は定性的調査で得られたものではあるものではあるが、筆者が以下に記すような期間に行ったものに基づいているため、長期にわたる参与調査の結果ではないこと、また学部生を対象とした教育への反映を考察することを第一義とするため、本論文における先行研究への参照は文化史研究の基本的業績に留めることを冒頭に述べておく。

## 2. 調査期間と地域

本研究の基礎となる知見は2015年1月23日～29日の間に、インドのケーララ州 Nelliampathy (以下、ネリヤンパティ) の Chandramalai Tea Estate (以下、チャンドラマライ農園)、タミルナードゥ州 Kodaikanal (以下、コダイカナル) の Loyola Coffee Estate (以下、ロヨラ・コーヒー園) および Regional Coffee Research Station (以下、地域コーヒー研究所) において行った調査によって得られたものである。これらは行政区域上2つの異なった州に分かれてはいるが、地理的には Anaimalai Hills (以下、アナイマライ丘陵) と呼ばれる同一の高原地帯に属し、文化的にも多くを共有するものであることを最初に指摘しておく。また以上の知見は、先行して筆者が行った定性的調査である「アジアにおける製茶技術の広がり発展に関する研究」(2011年度人文学部研究推進費による。大原良通人文学部教授との共同研究) および「インド映画に見られるヒルステーションの映像学的位置づけに関する研究」(2012年度人文学部研究推進費による) によって得られた知見と業績によって補強されていることも付言しておく。

### 3. 人文学部教育との関連

#### 3-1. 対象となる科目群

本論文では人文学部人文学科において主に比較文化コースの学部生を対象に2015年度前期に開講した「地域文化研究C」を主たる対象として考察する。なお、同様の活用は同じ受講生を対象として2015年度後期に開講した「文化交流論B」にも適応されたことを事前に付言しておく。

#### 3-2. 対象科目の目的と到達目標

2015年度の地域文化研究Cでは「ビバレッジ（飲み物）の変遷からイギリス飲食文化の特性を読み取ること」に定めた<sup>2</sup>。具体的には「イギリスの飲料というただちにビールと紅茶が思い浮かぶが、これが国民的ビバレッジとして定着するまでには長く複雑な歴史的経緯があった。本講義ではこの文化論的背景を主に酒税と茶税の変遷という観点から考え、身近な飲食物の背景に文化史的な大きな流れのあったことを理解する」ことを講義の主筋とした。これを学習することで受講生が理解すべき到達目標としては次の3点を掲げた。すなわち、「人間の生命維持に不可欠な飲料の摂取の仕方が特定の文化圏の食文化を決定する因子となり得ること」、「アルコール摂取に対する対応が文化圏ごとに差異があること」、そして最終的には「脱アルコール化の政策がプロテスタンティズム的近代化の発想と深く結びついていること」を理解することである。

#### 3-3. 対象科目の教育上の問題点とその対応法

当該科目のみならず比較文化コース開講の多くの講義科目において、教育に際して共通して見出しうる次のような問題点がある。人文学科の他コースにおいては中等教育の科目との連続性が受講生には見え易い（例えば「日本史」「世界史」から歴史文化コースへ、「英語」から言語文化コースへというがごとき）のに対して、比較文化コースの持つ領域横断的統合性と既成学術分野の業績を応用した定性的調査及び分析法は受講生が学部専門課程に配属されてから初めて接するものであり、これらを理解するのにしばしば困難を覚えるものである。そこで筆者としては教育において次のような対応法をもって受講生の理解の混乱を解消するように臨むこととした。すなわち、受講生が日常的に接するコモディティを題材として、それが定着するに至った複雑な文化背景を徐々に開示しながら、異文化交差のダイナミズムを理解させる方法である。

地域文化研究Cから一例をあげれば、食中飲料として水を恒常的に確保できない文化圏がグローバルにどれほど広がっているかを人文地理学的資料を援用して示し、アルコール飲料がその代替物として成立したことを理解させることによって、飲食文化的に考えれば酒は本来的には酩酊を目的とするものではなかったことを認識させるのである。比較文化の教育にはこうした異化効果を持ちうることで受講生の認識の地平を拡大させてゆく方法がすぐれて効果的である。歴史的に見て「水と空気は無料」という日本のコモンセンスがグローバルスタンダードでは少数派に属するものであることを理解すれば、異文化の接触が交差する文化史的流れの中で日本文化の特異性を確認することができ、自らの生得的文

化を多様な異文化環境の中で相対的に位置づけることが可能となってくる。このことはまた、人文学科が教員養成の理念とする「グローバルな視点を持ち、社会の変化に対応して、絶えず最善の教育を探求し、実践することができる」という要件を満たすことに直結することも強調されてしかるべきだろう。

### 3-4. 個別的問題点

ここでは当該科目の教育の過程で、英国における喫茶習慣の受容を説明する際に生じる個別的問題点に焦点をしばって考えてみる。ここに至るまでの講義を経て受講生は以下の点を理解していると前提する。

- ①産業革命を経て政治権力が農業資本家から産業資本家へと徐々に移行をはじめ
- ②離農して都市に流入した細民が労働者として活用される。良質の労働力を維持するために「酪酊しない」食中飲料が必要とされる。
- ③上流階級の嗜好品の飲料であった茶が国民的飲料として労働者階級にまで浸透してゆく
- ④茶の価格を低位安定させる必要性が生じるが、茶は英国には自生しないため、生産地である中国からの大量安定輸入が不可欠となる
- ⑤大量の茶の輸入は英国の対中貿易赤字を増大させる

ここに至って英国は植民地インドでの茶生産に着手することとなるわけであるが、ここで受講生に問題をさらに深化して考察させるに際して幾つかの障害が生ずる。受講生は中等教育の過程でいわゆる「三角貿易」を知識として持っていて、インドにおける茶生産に伴って発生した諸問題を比較文化的枠組みの中で理解するために、未だ次のような視点が欠けているためである。すなわちそれは(1)後世いわゆる「グレートゲーム」へと伸長してゆく西洋列強の地政学的視点、(2)茶が当初から地場の農業生産サイクルから分離した商品作物として耕作されたというグローバルな経済史的視点、そして(3)そうした「みずからの使用を禁じられた交換価値の生産」(臼井、1992、54)が既存の現地文化とどのように異文化衝突を起し最終的にハイブリッド化してゆくかという文化人類学的視点である。

上記2において説明した調査によって得られた知見は、これらの視点、就中(1)および(2)を受講生に理解させるために有効な資料をもたらした。それは最終的に人文学科が教員養成の理念とする「多様な学問領域を学んできたことを授業や生徒指導に生かして、生徒の個性や興味の伸長をはかることができる」との能力の涵養に適合するものである。そこで以下に調査の結果を簡潔に要約しながら、こうした資料がどのように教育に活用されうるかを論じてゆく。

## 4. 現地調査で得られた知見

### 4-1. 南インドにおける製茶業の導入

既存の研究(Ukers, 1935, Griffiths, 1967)から南インドへの製茶業の導入に関しては以下のように要約することが可能である。

- ①南インドの製茶業はインドへ茶生産が導入された直後の1830年代、つまり最適の産地

が発見できない時点で試験的に導入されたのがはじまりである。

- ②以降南インドの製茶業は順調に発展して一大産業となった。アッサムやダージリンのように世界的に知られた高品質茶の産地とはならなかったが、生産量に関しては北インドのそれに伍するものがある。
- ③南インドの製茶業は海拔千メートルを越える高地地域に限定して発展した。西ガーツ山脈のウータカマンドゥ（以下、通称に従ってウーティ）を中心とするニルギリ地方が主生産地であるが、他にも同様の海拔の高原に中・小規模生産地が点在している。
- ④それらでは旧来の住民の居住地であった平地とは地理的にだけではなく文化的にも一定の断絶がある。

#### 4-2. 調査地の人文・自然地理学的特性

南インドでの製茶業は西ガーツ山脈の南端を中心にして展開された。ヒマラヤ山脈を北の底辺として大洋に突き出た逆三角形の形状をしたのがインド亜大陸であるが、中央にデカン高原があり、その両側で巨大なバットレスとなって高地と平原を隔てているのが東西のガーツ山脈である。南インドで最大の茶生産地ニルギリは西ガーツ山脈の南端にあり、ここ以外に何か所かで茶生産が試験的に導入された。

これを理解するにあたって19世紀の南インドの行政区分を認識しておくことは重要である。英領インドは植民地政府（インド政庁政府）が直接統治する地域と名目上の自治を許された土侯領（いわゆる藩王国）に分割されていた。前者が圧倒的多数で後者もインド政庁政府の厳格な管理下に置かれていたわけだが、南インドでは小規模ながら比較的有力な藩王国が存在しており、これが製茶業の成立に微妙な影響を与えている。直接統治領には管区制が敷かれていたが、前述のニルギリはマドラス管区とマイソール藩王国の境にあってマドラス管区側、その他の試験的栽培地はアラビア海に面した西ガーツ山脈の斜面地に点在しており、複数の藩王国領に接する地域が大半を占めた。こうした行政区をまたいだ地域に茶の植樹が行われたのは、ひとつには栽培に適した地理的要因に恵まれていたということもあるが、トライバルと呼ばれる未開の狩猟民が放浪する以外に定住民がなく、原生林に覆われて農耕地としては開発されておらず、租税収入の上では利用価値のない場所だったため、所有権問題がほとんど発生しなかったことも大いに関係している。

西ガーツ山脈は北緯11度線あたりで一旦途切れ、100キロばかりの平地が続いたあと（パーラッカド地峡）再び隆起して逆三角形の頂点、亜大陸南端のカーニャマリ（旧名コモリン岬）の手前まで数百キロにわたって連なっている。これがアナイマライ丘陵である。語源は古代タミル語で象の住む山々であるとされ、何千年にもわたって文明から切り離された未墾の密林であったことが分かる。地理的環境としては隣接する西ガーツ山脈と連続性が強い。

これら山脈とアラビア海にはさまれた細い海岸地域をマラバール地方と通称するが、ここは16世紀にポルトガル人が最初に到達したという経緯からインドではもっとも長い西洋文明との接触の歴史があり、時代の変遷とともにポルトガル人からオランダ人、そしてイギリス人へと支配的勢力が変わっていった。マラバールではそうした複雑な背景もあって

インド政府の直接統治が及ぶことなく、茶栽培の試験的導入が行われた18世紀中葉には北部のコーチンと中央部から南部にかけてのトラヴァンコールの二つの藩王国が治めるところとなっていた。第一の調査対象となったネッリヤンパティはパラッカド地峡に面したアナイマライ丘陵の北端のプランテーションで、歴史的にはコーチン藩王国領内に収まる。そのため現在は行政管区上ケーララ州に属する。一方第二の調査対象としたコダイカナルは緯度的にはネッリヤンパティより僅かに赤道より、アナイマライ丘陵の東端、パラッカド地峡がテーニからマドゥライへと延びる広大な沖積平野へと開いてゆく途上にある。こちらは高地のプランテーション開発がマドラス管区によってなされたため、現在はタミルナドゥ州の行政管区内にある。この二つのプランテーションに共通する特性は多いが、特徴的に相違点も見られる。それらを概括するには、熱帯・亜熱帯植民地に成立したヒルステーションと呼ばれる特殊な空間を手がかりに説明するのがもっとも望ましい。

#### 4-2-1. ヒルステーション

ヒルステーションは英領マラヤや東アフリカ植民地、蘭領ボルネオにも存在したことが確認されているが、とりわけ多数にかつまた大規模なものが設置されたのは英領インドであり、その建設は1859年のインド大反乱終熄後に急速に進んだ。ヒルステーションの基本的な機能は避暑地であり、幾つかの大規模なものでは酷暑期の数ヶ月にわたって行政府の機能がそのまま移転されて第二の首都もしくは管区首府の役割を果たした。北インド（現ヒマチャルプラデーシュ州）のシムラーやニルギリのウーティなどがその例である。植民地研究におけるヒルステーションの重要性は近年徐々に着目されており（Crossette, 1999）別稿で論じたこともある（赤井, 2013）ためここでは詳述しないが、植民地において絶対的少数派であることを余儀なくされた白人コロニストが、閉鎖された空間の中で母国の文化や生活習慣を再現しようとした場所であることは指摘しておく必要がある。インドにおいて大反乱以降急速に建設が進んだのもそのためである。

本論文において重要なのは、ヒルステーションが例外なく平野部とは切り離された高地に設置され、その位置が茶やコーヒーなどのプランテーションと重複していたという点である。興味深いのはプランテーションは決してヒルステーションの同義語ではなく、プランテーション開発が行われてもヒルステーションとはならなかったものが南インドの高地に点在していることである。別名「貧者のウーティ」と呼ばれたネッリヤンパティはその代表である。以下、2015年の調査で得られた知見を中心に、この「未然のヒルステーション」を考察してみたい。

### 4-3. アナイマライ丘陵のプランテーション

#### 4-3-1. ネッリヤンパティ

「貧者のウーティ」と称される高原リゾートは南インドではネッリヤンパティ以外にもかなりの数にのぼるが、按ずるにこの名の由来は、ヒルステーションとしての条件は満たしているものの白人コミュニティとしてまでは認知されなかった（そのため高級官僚や士官などが家族を連れて定期的に移動してくることがなく、二流のコロニストしか訪れるこ

とがなかった) ことから来ていると想像できる。そして部分的にせよヒルステーションとしての条件を満たしていたということは、当然そこでは茶に代表される商品作物の栽培に着手していたことを意味する。ではこの貧者のウーティにどのように製茶業が導入されたのかを考えてみよう。

英領インドでは最初の試験栽培で一定の目算が立った時点で、製茶業は官営から離れて徐々に民間資本の手に移っていった。政府による介入を必要最小限に抑えて産業の発展を金融市場で資本調達した民間に委ねるとするのはイギリスの伝統的なやりかたではあるが、却って英領インドでは投機性の高くリスクの大きいこの新興産業に乗り出そうという人材に事欠かなかったことは指摘しておいてよい。これにはイギリス特有の階級制の問題がかかわっている。長子相続が定着していたこの国では上流階級子弟のうち長男を除く次男三男は富の継承すなわち領地の相続に与ることができず、自らの手で生計を立てること(言い換えれば上流階級にふさわしい品格ある生活をおくれるだけの財産を獲得すること)を迫られた。

インドへ派遣されてきた軍人や東インド会社員(東インド会社解散後はインド高等文官と呼ばれるインド省派遣の植民地官僚となる)の大半はこの社会層から供給されることが伝統となっていた。当然在印期間も長く現地の事情にも通じているため、些少の投資リスクは覚悟の上で製茶業に乗り出すには最も意欲的な階級層であったことは十分に考えられる。インド製茶業に関する基本的な文献とされるユーカーズの研究書には、密林を茶畑に変えるべく辺境で官営地の払い下げを受けたコロニストの名が幾つも記載されているが、その中でも興味深いことにインド軍勤務経験者がずば抜けて多い(Ukers, 1935)。これはそうした辺陬の地に軍の士官が臨時の行政官として派遣されていたことが明らかに関係している。かれらには軍務を全うして帰国しても恩給で品格ある生活をおくれる保証はなかったため、退役後インドに留まって製茶業に着手し、それによって蓄財を図ろうとの発想を抱いたとしてもさして不思議ではない。長年アッサムで茶木の移入に尽力し茶産業の礎を築いたスチュアート大尉はその成功例である。

ネッリヤンパティの開発は19世紀に始まるが、民族資本ではなく白人の手によって着手されたことは他地域と同様である。異なる点はこの地域がコーチン藩王国の領内にあったため、ディワンが積極的にかれらの入植を促したことにある<sup>3</sup>。チャンドラマライ農園で行った聞き取り調査によると最初にイギリス人資本が入ったのは1832年、当初はコーヒー栽培を目的に開拓に着手、遅れて茶が導入され、1863年には幾つもの農園が成立していた<sup>4</sup>。公文書から見ると18あった農園のうち14までもがヨーロッパ人によって経営されていたことが1908年に記録されている(*Imperial Gazette of India*, 1908)。

現在チャンドラマライ農園をふくめネッリヤンパティの全エステートは民族資本によって経営されている。土地の所有権じたいは国有となっており、エステートはこれを永代租借しているが、農園の拡張や新規の開拓には林野庁の許可が必要である。チャンドラマライ農園は約405haの面積を占めており、うち202haで茶、106haでコーヒーが栽培されている。茶の年間産出量はヘクタールあたり約3350kgである。その他の産品としてはオレンジ、コショウ他のスパイス、燃料用の木材がある。スパイス類は副次的産品として複合農

法によって得られるが、その重要性は後に論じる。

チャンドラマライ農園には約400名の労働者が雇用されており、うち60%はこの地域のトライバルから（うち80%が主要トライバルのカダル族）、残り40%は隣州タミルナードゥからの出稼ぎ労働者によって占められている。農園は労働者とその家族のために薬局、薬剤師、看護師、訪問医を具えた診療所を設けており、農園労働者とその家族からなる独立したコミュニティを形成している（写真1）。



写真1 チャンドラマライ農園付属の製茶工場  
(2015年1月14日筆者撮影)

#### 4-3-2. コダイカナル

タミルナードゥ州ディンディグル県に属するコダイカナルは1845年にマドゥライのアメリカ人宣教団によって開かれた（Crossette, 1999, 92-95）。以降、南インドではウーティに次ぐ大規模ヒルステーションとして知られ「ヒルステーションの王女」の異名を持つ。ネッリヤンパティと比較して、コダイカナルにはヒルステーションとしての要件を充足する次のような特徴がある。すなわち、3万5000を越える人口を抱えるだけでなく、その西洋風の都市景観がインド全国から新婚旅行客や観光客を多数誘引する高原リゾートであり、同時にアメリカン・スクールの通称で知られるコダイカナル・インターナショナル・スクールや名門女子校プレゼンテーション・コンヴェント等伝統ある寄宿制学校を擁する教育拠点としての役割も果たしてきたことである<sup>5</sup>。これらはすべて白人コロニストによって開発されたことに起因するヒルステーションの文化的特性といえる。

一方でコダイカナル周辺の商品作物栽培はほぼコーヒーとバナナを主とした果実に特化されており、茶栽培は州境を越えたケーララ州側のムンナールに集中している。インドがエチオピアに次ぐ世界第6位のコーヒー生産国で、2014年統計で34万トンを生産していることは余り知られていない。これは高級品種アラビカの産出量が少ないこと、および生産の大半が国内消費されることと関係している。インドのコーヒー栽培の文化史的背景、特に茶生産との関係については

別稿で論じたので（赤井、2013）ここでは詳述しないが、栽培地が南インドに集中しており、就中カルナータカ州のコダグ地域が一大産出地となっていることは指摘しておかねばならない（表1）。今回の取材でコダイカナル周辺のコーヒー栽培はコダグとの

表1 2013年南インドのコーヒー生産

（単位はトン、*The Report of The United Planters' Association of South India, 2014* より筆者作成）

	アラビカ種	ローバスタ種	合計
カルナータカ州	77425	152800	230225
ケーララ州	2075	62125	64200
タミルナードゥ州	12800	4570	17370
その他	6300	105	6405
合計	98600	219600	318200



写真2 ロヨラ・コーヒー園の内部  
(2015年1月27日筆者撮影)



写真3 タンディグディの地域コーヒー研究所  
(2015年1月27日筆者撮影)

差別化のためにアラビカ種の改良と増産に力点を置いていること判明した(写真2)<sup>6</sup>。インドのコーヒー生産は連邦政府農林省直轄のコーヒー部局によって指導されており、品質改善や増産を目的としたコーヒー研究所が全国の生産拠点に設置されているが、コダイカナル付近のタンディグディにもそのひとつがある(写真3)。この地域がコーヒー生産の拠点と認知されていることの証左といえる。

南インドのコーヒー生産に関しては本稿の直接の分析の対象とするものではないが、茶生産と文化史的重複があるという意味で、人文学部教育における現地取材の反映を論ずるにあたってこれを欠くことができない。以下に3-4で指摘したような問題点への対応を考察することになるが、その過程ではこの問題もふくめて検討してみる。

## 5. 取材から得た知見の教育への反映

### 5-1. 商品作物と大英帝国経済圏

受講生は近代インド史の適切な知識を欠いているため、独立前のインドの農業といえば地産地消でローカルに完結した中世的状況を連想し勝ちだが、茶栽培を比較文化的に認識するためには、マラバル地方の農業生産はヴィクトリア朝末期には完全に大英帝国経済圏に即した世界的流通に組み込まれていたことを理解しなければならない。なぜなら藩王国が国外資本の導入を図ったこと背景には、農園開発が地域的な消費のためではなく既に世界的流通の一環となっていた商品作物の生産を目的にしていたことが関係しているからである。トラヴァンコールとコーチンの藩王国が植民地統治下でも繁栄することができたのは、従来の地代による租税収入にだけ頼るのではなくそうした農業資本から得られる収益で国家財政を補完できたためであり、それを踏み台にして他地域に先駆けて近代化に踏み出すことができたのである。

この点に関して受講生の理解を促すためには、カシューナッツとココヤシを例として説明することが効果的である。この二つは元来、地元の飲食文化に密着した農産物であり、ヨーロッパ人の到来以前から地産地消を目的に栽培されてきたものである。特にココヤシは種子(ココナッツ)の胚乳が現地の基本的食品の原料として利用されてきたし、それ以外の液状胚乳(ココナッツウォーター)は日常飲料に、胚乳を乾燥させたコブラから得られる油は調理や灯明に、硬質の種子の外殻は容器や宗教儀礼に、また外皮からはコイアと

呼ばれる強靱な天然繊維が得られロープやマットなどに加工される等、地元の日常生活には欠かせない重要な産物であった。しかし英領インド時代に入ってこれらは大英帝国のグローバルな経済圏に組み込まれ、商品作物として大規模に栽培されるようになる。カシューナッツから得られる油は20世紀初頭に爆発的に需要が増大する。これは実はアメリカで映画産業が勃興し映画館が一般化するにつれポップコーンが普及するが、コーンをフライするのにカシューナッツ・オイルが用いられたためである。またココヤシ由来のコイアから作るマットレスは19世紀中葉から需要が高まる一方だった。これは玄関マットに絨毯を用いる余裕のないイギリスのロワー・ミドル家庭がそろって耐久性に富み汚れ落ちに優れたインド産マットレスを買い求めたからである (Jeffrey, 1994, 73-74)。このように日常にある既存品との隠れた関係性を提示することは受講生の視野を拡大するのに役立つ。



写真4 ケーララ州パーラッカド付近のヤシ園  
(2009年11月30日筆者撮影)

トラヴァンコールとコーチンの藩王国ではこれを受けて水田をヤシ園に転換しはじめた。今日ケーララ州を旅行するとあらゆる平野部で目にする広大なヤシ園はこの頃に成立したものである (写真4)。この転換は第一次大戦まで持続して増大する。ひとつにはインド政府がビルマを版図におさめ、イワラジ川下流地域の穀倉地帯で生産される米がインドの国内市場に流入するようになったため、米価が低迷していたことも関係している。開戦でドイツ海軍がベンガル湾まで進出した結果、ビルマからインドへの米の輸送が滞りがちになって初めて、藩王国政府は主食確保のために水田保護に乗り出すのである。

これらの情報を提供することは3-4で指摘したような地政学的視点およびグローバルな経済史的視点を受講生に認識させることに役立つ。受講生がこうした文化的な「異化効果」による気づきを単なる一過性の知識ではなく比較文化の地平を拡大することに活かすならば、教職においても「多様な学問領域を学んできたことを授業や生徒指導に生かして、生徒の個性や興味の伸長をはかることができる」の能力を修得することが強く期待されるのである。

## 5-2. プランテーションの多層性と複合農法、および映像資料の活用

上記の教育効果を促すためには、この地域のプランテーションの多層性を紹介することも有効な手段となる。マラバル地方へのプランテーションの導入は決して一律ではなく、人文地理学的にも自然地理学的にもデリケートな多層化を起こしていることが調査から判明する。ネッリヤンパティを例にして考察してみよう。

ネッリヤンパティへの商品作物栽培の導入はまずコーヒーに始まり、茶がそれに続いたことが取材から明らかとなっている。通常コーヒーと茶はその最適育成高度に微妙な差があり、ウーティのような大規模栽培地では茶栽培地域から若干海拔が下った山腹斜面で



写真5 ネッリヤンパティのコーヒー園と茶園の連続  
(2012年8月24日筆者撮影)



写真6 アンナマライ丘陵のゴム園  
(2015年1月14日筆者撮影)

コーヒーが栽培されている。他地域でも茶が主でコーヒーが従というかたちで両者とも栽培を行っている地域は少数ながら見受けられるが、この二つが重複することはあまりない。しかしネッリヤンパティでは両者が連続して、すなわちコーヒー栽培地が尽きたところに隣接して茶木の植樹がなされている例が見られた（写真5）。これは両者の連続性と区分を視覚的に認識するには格好の材料となる。

さらに海拔の下った山腹ではゴムの栽培が行われている（写真6）。ゴム栽培はコーヒーと茶に比べて高度差があるばかりではなく、時代的にも開始された時期が遅く、また開発のための資本が白人コロニストに依存するのではなく民族資本によって調達されたという点に特徴がある。現在ケーララ州は全インドのゴム産出量のうち9割以上を占めているが、ゴム栽培の本格的導入は1920年代に始まったもので、その背景にはアメリカにおける急激なモータリゼーションによってタイヤ用ゴムの需要が高まったことが関係している。第二次世界大戦中の日本軍のマラヤ植民地占領のよって連合軍へのゴムの供給が途絶したことが、その代替地が必要とされたことがこれに拍車をかけた（Jeffrey, 1994, 80-81）。ゴム園開発に資金を投入したのは資本力を蓄えたインド人資本家だった。

このようにプランテーションは地理的には文化史的にも多層化された状態でアナイマライ丘陵に展開されているおり、この文化現象の一種の雛形をなしているのがネッリヤンパティであるといえる。これは人文学科の教職教育の理念である「人間行動およびその文化所産との有機的関連をそれぞれ理解」するという要件を満たすのにすぐれて有効な題材となる。またここに、取材で得た映像資料を補助的に用いることは受講生の理解を深化させるのに役立つ。本論文では参考資料として添付しうるのは静止画に留まるが、実際の講義ではこれに動画をも加えて、現地の自然環境とそこに展開される文化所産としての商品作物栽培を三次元的に提示することは、教育の手法として有効である。高度差に準じて平地から高地へとココヤシ、ゴム、コーヒー、茶と農産品が徐々に変化してゆくことを視覚的に把握することが可能なためである。ことに上記で述べたような、コーヒーと茶の栽培が連続して展開されている状況は、他に類例が少ないという意味で教育的効果が大きい。ここでは最後に映像資料提示の実例として、プランテーションにおける複合農法を考えてみたい。

南インドはコショウやカルダモンなど一大産地として知られる。これらは現地の食文化



写真7 コダイカナルのコショウ栽培  
(2015年1月27日筆者撮影)



写真8 カルナータカ州コダグ地方のコーヒー  
とコショウの複合栽培  
(2011年8月25日筆者撮影)

において不可欠なスパイスであると同時に世界的な需要も大きく重要な輸出産品にもなっている。これらのスパイスは日本の日常生活において親しいものであるが、しかし受講生にとってこれらが商品作物としてどのように栽培されているかを知る機会は少ない。例えばコショウは単独でも栽培されるが(写真7)、コーヒー園において複合農法で栽培されるケースが多い。コーヒーの生育に最適な熱帯雨林にはつる植物であるコショウの支え木となる高さの高木に事欠かないためである(写真8)。コーヒーとこれらのスパイスの複合農法はインドへコーヒーが導入されたと同時に開始された。というより、伝統的にスパイスの栽培が行われていた地域に重複してコーヒー園の開発が進められたと見た方が実情に近いだろう。したがってネッリヤンパティなどでこうした複合農法を大規模に展開している農園ではスパイス類を副次的産品と呼ぶのはためらわれるほどである。いずれにせよ本論文にサンプルとして添付した画像だけでも、こうした視覚的な保持資料が南インドの特定地域の持つグローバルな経済流通への強いむすびつきを理解するうえですぐれて有効的であることは理解できるだろう。

## 6. おわりに

以上のような考察から、2で示したような筆者による現地取材で得られた知見は、人文学部人文学科の教職教育に有効な題材となり得ることは明らかである。なぜなら、インドにおける茶に代表される商品作物栽培は、単なるローカルな地産地消のための農産品ではなくひとつの文化所産であり、これを理解することはそれを生み出した人間行動との有機的関係にまで深化して考察することにつながるからである。そうした人間行動は、集団化してゆく過程で地政学やグローバル経済といった地域の枠組みを超えた国際的なダイナミズムとなり、それが我々の暮らす現代日本の日常生活と関連してゆく。日常生活と世界をつなぐ見つけにくい回路を正確に把握することで、日本文化のもつ特殊性と異文化との関連性を自発的に意識できるようになるはずである。こうした知見をもって授業や生徒指導

に臨めば、人文学科の教職教育で修得した能力はじゅうぶんに活かされることになるだろう。

また、筆者による現地取材で得られた知見は、3-4で指摘した「異文化衝突によって生ずる文化のハイブリッド化」の実例を受講生に提示するにも有効であると考えられる。本論文では紙数の関係からこれに言及する余地がなかったが、これを認識することもまた教職教育では有効なディシプリンとなり、人文学科が教員養成の理念としている「グローバルな視点を持ち、社会の変化に対応して、絶えず最善の教育を探求し、実践する」との目標を実現することに役立つはずである。この点に関してはいずれ稿を改めて論じてみたい。

### 参考文献 (抄)

赤井敏夫「インド人お茶に会う」『茶味』創刊第一号、2012年。

\_\_\_\_\_「ディグリーコーヒーの秘密」『茶味』第二号、2013年。

白井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る～近代市民社会の黒い血液～』中央公論社、1992年。

Brown, Hamilton. *The Sahibs, the Life and Ways of the British in India as Recorded by Themselves*, 1948, William Hodge.

Crossette, Barbara. *The Great Hill Stations of Asia*, 1999, Basic Books.

Griffiths, Sir Percival. *The History of the Indian Tea Industry*, 1967, Weidenfeld and Nicolson.

Jeffrey, Robin. *Politics, Women and Well-Being*, 1994, Oxford University Press.

Khare, R. S. & Rao, M. S. A. ed. *Food, Society & Culture*, 1986, Carolina Academic Press.

Ukers, William H. *All About Tea*, 1935, The Tea and Coffee Trade Journal Company.

(本研究は2014年度神戸学院大学学内研究助成金C「インド製茶業をめぐる自然環境と飲食文化の研究～北東州と南インドを中心として～」を受けたものである)

(本研究は2012年度人文学部研究推進費「インド映画に見られるヒルステーションの映像学的位置づけに関する研究」を受けたものである)

(本研究は2011年度人文学部研究推進費「アジアにおける製茶技術の広がり発展に関する研究」を受けたものである)

### 注

- 1 以下、人文学部人文学科の教員養成の理念に関する引用はすべて本学教職教育センターのウェブサイトに掲載されたものによる (<https://www.kobegakuin.ac.jp/facility/tec/ug/>) (2015年12月15日閲覧)
- 2 以下、本講義に関する引用はすべて本学シラバス・データベースに掲載されたものによる。
- 3 デイワンもしくはディーワーンはコーチン藩王国の宰相で藩王(マハラージャ)に代わって王国の実質的権力を握っていた。
- 4 以下、ネッリヤンパティにおける聞き取り調査はすべて2015年1月24日にヴィーカイ製茶株式会社チャンドラマライ農園支配人C・ハリダーサン氏(C. Haridasan, Manager, Chandramalai Estates, Veekay Tea Company (P) Ltd) に対して行われたものによる。
- 5 Presentation Convent はイエズス会の設立になる。コダイカナルへのキリスト教宣教団の進出に関してはアメリカン・ミッションに先駆けてイエズス会によるものがあつた(Crossette, 100)。
- 6 以下、コダイカナルのコーヒー園に関する聞き取り調査はすべて2015年1月27日にジョーゼフ・コーヒー製造会社ロヨラ・コーヒー園副支配人N・ピーター・ナレーシュ氏(N Peter Naresh, Sub Manager, Loyola Estate, Josef Coffee Curing Works) に対して行われたものによる。